

昭和15年（1940）、永代橋の下流に勝関橋が完成した。この年は、紀元2600年にあたり、国をあげて、色々の行事が計画された。なかでも、東京オリンピックと万国博覧会の開催は、日本の威信と躍進ぶりを、国の内外にしめす国家的イベントとして取り組まれた。

しかもそれは、デビューにふさわしく、当時のハイテク技術の粋を集めた可動橋であり、万国博覧会場の入口をも飾るはずであった。

万国博覧会の会場予定地は、月島（注：会場予定地は、現在の有明・東雲および豊洲の一部にあたる）、勝関橋は、その幹線交通路にあたり、博覧会場へのメイン・ゲイトとして位置づけられた。また、船でくる人には、“歓迎門”の役割を期待されていた。

だがこれらのビッグ・イベントは、日中戦争が激しくなったため中止、橋だけが完成した。

橋の開通式は、昭和15年6月14日。開通式には、ふつう橋の長久を願って、お年寄りや親子三代による渡り初めがおこなわれるが、勝関橋ではさらに、開いた橋の下をくぐる“くぐり初め”もおこなわれた。

日本の橋梁技術は、震災復興事業を機にようやく自立した。事業が終了すると、復興局は解散、各技術者はもとの職場にもどったり、あたらしい橋梁技術の指導のために各地へ散らばった。しかし東京市の技術者はそのまま在職したので、東京市には最新の土木技術を会得した技術者集団がいたのである。

勝関橋の跳開部分の設計者は、安宅勝。娘さんにあたる田中ルリさんの話によると、勝関橋の架橋計画がもちあがったとき、アメリカン・ブリッジ会社から援助の申し出があった。しかしそれを断わり、日本人の手で設計・施工をおこなったのが、勝関橋である。わが国最初のシカゴ・タイプの二葉の跳開橋で、しかも東洋一の規模を誇った。二葉とは、両側に「ハの字」にひらく橋桁を、軽やかな葉っぱにたとえた優雅な表現である。

可動方式ではいくつかの特許がとられ、可動橋の技術では、当時世界の最先端の設計であった。

橋が開くと交通渋滞をおこすことから、戦後の昭和45年（1970）を最後に、橋の開閉はやめられ、開かずの橋になった。

わが国では可動橋は次々に撤去されているが、勝関橋のモデルになったシカゴ市には、ダウントウンに25もの可動橋が現存し、今もなお稼働している。中には1915年（大正4）に架設された可動橋もある。ハドソン川とイースト・リバーをむすぶニューヨークのハーレム川でも可動橋が、活躍している。ウォーターフロントが注目され、環境にやさしい舟運交通が見直されている今日、わが国の可動橋についても再考の余地があるかもしれない。

〔 I T 〕

竣工年月：昭和15年6月

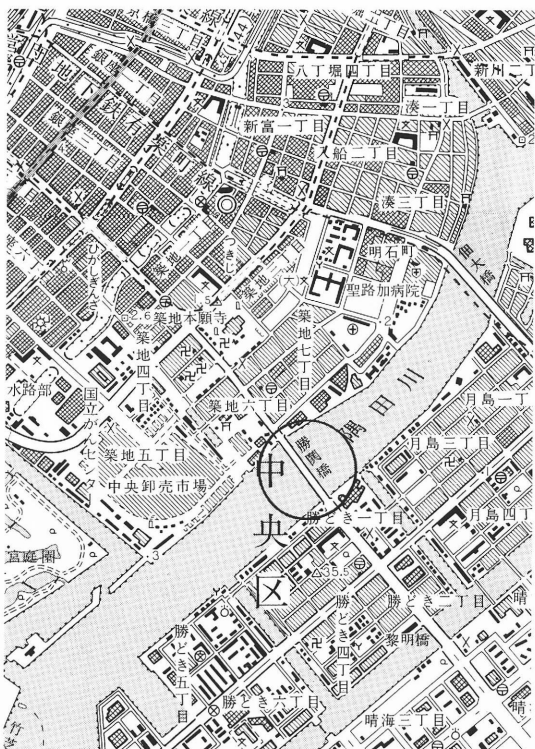
所在地：東京都中央区

河川名：隅田川

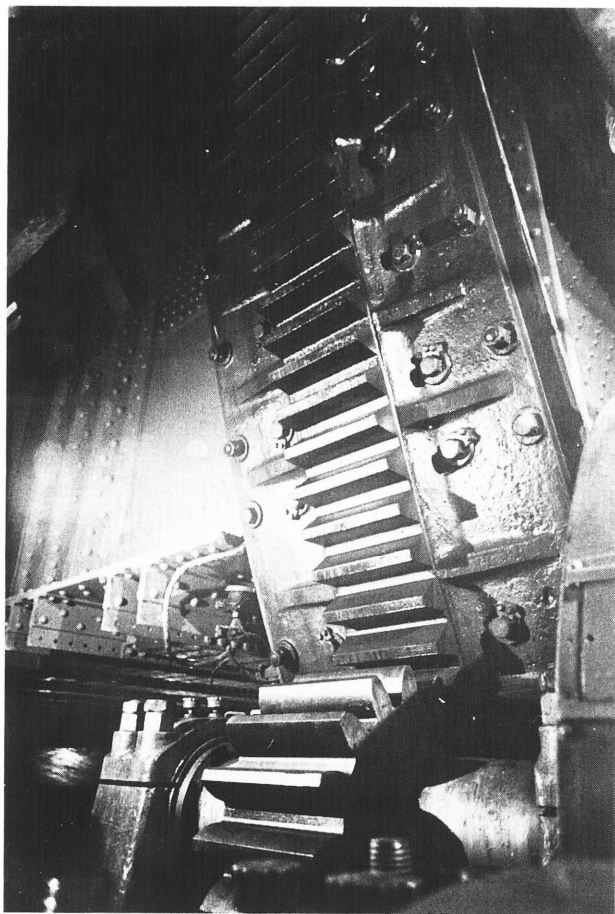
橋長・幅員：246.0m・22.0m（車道16.60m＋歩道2×2.70m）

径間数・支間長：①1×86.0m＋②1×45.6m＋①1×86.0m

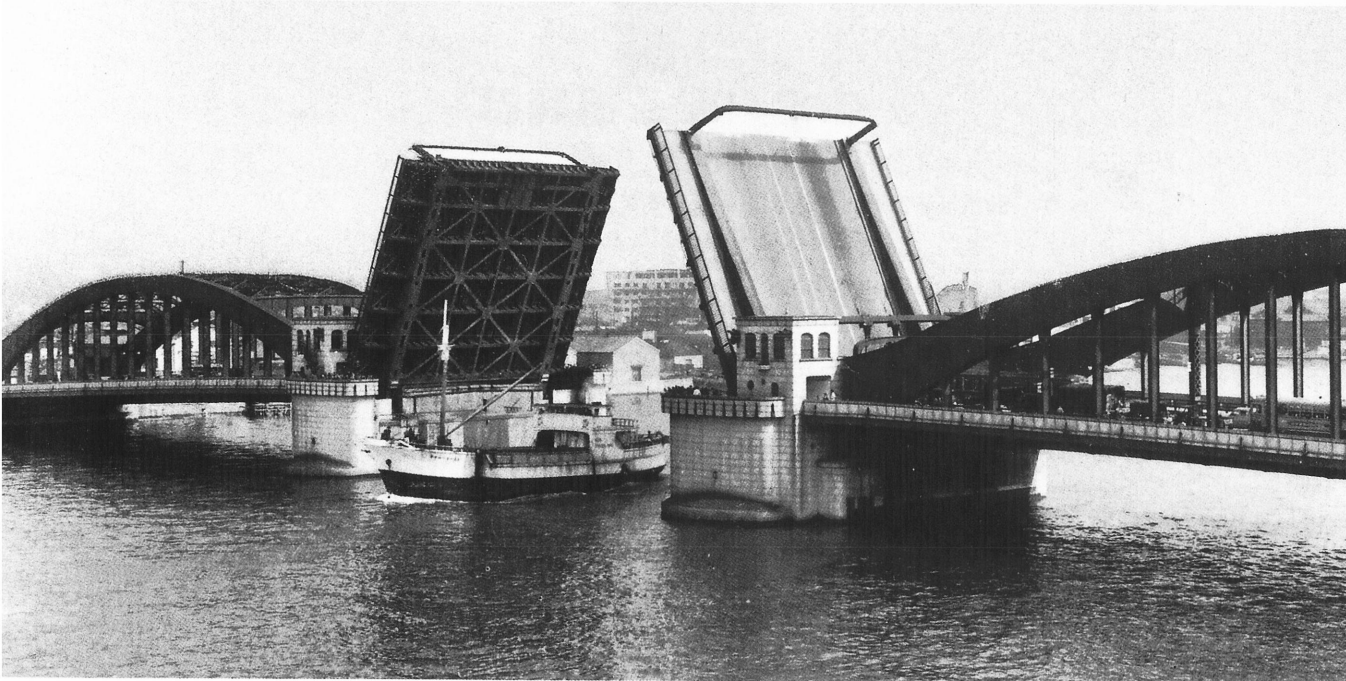
形 式：①下路ソリッドリブタイトアーチ、②バスキュール式跳開橋



(1:25,000 東京首部, 東京南部)



この歯車を回転させて橋をあげる。〈写真提供・東京都〉



橋が開いていたころの雄姿。〈「みんなのチ工を集めて勝鬨橋をあげる会」のパンフレット〉